

わが父を語る

西川浩一路

今回のテーマ“わが父を語るに”際し、自分の父についての所感整理してみました。上手くすべてを表現できるか自信ありませんが思い出す事々を綴ってみました。

わが父は厳しい環境の中で苦勞を続け、一言の愚痴も恨み事も言わず語る際には自らの苦勞を笑い話にして周りに喋っていました。

明治40年生まれ、平成2年享年84歳でこの世を去りました。父からその生育環境や実家の状況を聞いたことも尋ねたこともなかったので委細を知らずまま過ぎたことを悔やんでいます。

父の親父つまりわが祖父は適当な遊び人であつたらしく、5人の子供（つまり、父の兄弟4人の弟と1人の妹）をなしながら、妾を2-3人ももつという今の常識では考えられない生活をしていたようです。その子供は皆小学校出るか出ないかで丁稚奉公に出され、自分一人が適当な生活を送っていたように思います。

後年の事ですが、父が幼児であつた自分をつれ暮らす裏長屋よりずいぶん瀟洒な箕面の妾宅に連れて行ってくれたことわずか1回の出来事であつたのに、なぜか鮮明に覚えています。残された母親と未婚の兄弟の一家の生活の経済的負担は多分に父の肩にかかっていたと思われます。さらに後年終戦後、その妾がやっていた料理屋の再建資金まで無心に来られていたようです。

自分が物心ついて記憶に残る年齢になっていたときは船場の帽子問屋の番頭を務めていたようでその頃が一番安定した平穩な時期でなかったかと思ひます。それまでの職歴、実務経験はあまた画工の弟子まがいのことなどもしたようで、絵も上手く文字も習字的でないが印刷態に似た綺麗な字を書いています。



家が上本町5丁目の寺町近くで小学生入るか入らないか位のころ2歳上の兄と夏夕暮れ近鉄上本町店の食堂によくアイスクリームを食べに連れて行ってくれたこと覚えています。小学入学前のころハイキングで信貴山から生駒遊園地まで生駒山縦走に兄と共に連れ出し、途中で歩けなくなった自分を背負ってケーブルの駅までつれ帰ってくれました。

その途中、山上の屋台で食させてくれた黄色い西瓜はその時初めて目にしたこともあり今も忘れ難い記憶として残っています。



しかし、先の大戦で平穏な生活は失われ徴用を避けるため帽子屋を辞め軍需工場の旋盤工になったにもかかわらず海軍に召集されその直前に大阪大空襲に遭い、1週間の召集猶予で海南市の海軍基地に入営する羽目に遭いました。焼け出された家族を妹が嫁いでいた和歌山に疎開させての事でした。その和歌山も市内であったのでこれも空襲で焼け出され。無一物が無ゼロ物に家族はなりはてていました。どんな気持ちであったろうかと思えます。

このころ自分は学童集団疎開で滋賀県の稲枝にいました。大阪大空襲で空が赤く染まるのを望見した覚えがありますが我が家の炎とは知りませんでした。この集団疎開に当たり持参する物すべてに名前を書き入れるに当たり丹念に準備してくれました。今もその時自製して持たせてくれたマッチ箱3ヶを積みて装幀した小物入れは形見とした終生の宝物としています。

終戦後はそれこそ大変でした、勤めていた帽子屋は廃業していて父が熱心に再開を薦めても再開することなく、やむなくどうして工面したのか分からないがありとあらゆる仕事で日銭稼ぎをして家族を養っていました。旧軍放出の電線を剃刀で被覆のゴムを切り裂き中の電線を取り出して金属材料として売り、ゴムは適当な長さに切り木片の握りを付け縄跳びとするのがあり、ゴムの切り裂きを手伝わされたことがあります。すべて闇市の商品となったのでしょう。その後、帽子界の縁を辿り無一物から帽子の製造販売を始め、自分が高津入学時にはこれが家業となっていました。

その配達を手伝わされ自転車に木製の枠を付け重くはないが減法嵩張る段ボール箱を積んで得意先に届けたことが今にして思えば、わずかに行った親孝行であったかと・・・考えればもっと積極的に自分でなしうる仕事を手伝わなかと悔やむことしきりです。

高津入学時には入学を喜んで付き添って来てくれました。その際秋山教頭から聞かされた“学年末になって単位が足らぬからなんとか単位が取れるように斟酌してくれとまま父兄から懇願あるが、当校は学業については厳正に処し、一切情実を入れず事務的に処理することを校是としているからよく心得へて事後泣きつきに来ても一切取り合わない”が、肝に込め父に心配かける結果を招かぬよう真剣に勉学に励まねば入学時のレベルではとても付いていけぬと自覚した。

今にして思えば、どうして父の業を積極的に手伝はなかったかと自省すること頻りですがもうどうにもならぬことです。子供から見れば親はなんでも知っており、なんでもできるスーパーマンで当然と思って育て来たが。世の中に出て必ずしもそうでない親がいることを知り、父は学歴もないのに万物に通じ、文学、絵画などの教養面でも本も読まぬのにどこでどう覚えたか不思議な能力者であったと思います。

父母を語る

高津 11 期生 井上文男

母 29 歳 父 32 歳の 5 月に私を出生したのですが、母は 38 歳で早逝したので接触 9 年、それに対して父は当時の平均寿命を 10 数年上回る 88 歳まで長命し死去までぴったりと暮らして接触 56 年、その思い出量は 6 倍で、母についての記はあまりありませんが、父については山ほどあります。

父の思い出といえは最終的にはその背の温もりが胸によみがえります。

3月8日夜東京大空襲の焼夷弾ふりそそぐ火の中をかろうじて逃げのびられ、疎開先両親の生家新潟県南蒲原郡大崎村に向かう寒々とくもった一面雪原の2kmの道を父に背負われていたのが4歳10ヶ月の私でした

雪に埋もれた藁ぶき母の生家の黒い影が遠望されたとき、3歳下の弟を背負った母、仏壇を背負った祖母がほっと安堵の声、「さあもうすぐだぞー」と軍靴で一步一步と雪を踏み抜きながら振り向き背



後についてくる 4 歳上の国民小学校 32 年の兄 (KOZU 7 期一昨年死去) に声をかける。父の暖かい背に頬をゆだねていると寒さと恐怖でカチカチになっていた歯の音かとまる。

3月8日の朝、赤紙応召で37歳の父は、僧侶の父の兄と見習い将校のその息子、そして母方の祖母に見送られ出立した。だから火の中を逃げ惑うときは、父は居らず、叔父と従兄が見送りに来ていなければ、母と祖母だけでは恐らく逃げきれず、今、これを語ることはなかったでしょう。

応召集合した千葉の暁部隊船舶工兵隊の駐屯地から東京の空全体が真っ赤になっていたのが見え、「ああ、こらだめだ、みんなやられているな」と暗澹となった。

東京に家族のあるものには即 5 日間の特別外出許可が出て東京に戻ったら案の定 焼野原ばかり、昨朝出た秋葉原近くの神田和泉町の家も当然焼失していた。

絶望感9分でかねて避難は一旦池袋にある父の姉の家に行くことになっていて、池袋は当時はまだ家並すくなく畑が多い半田舎で空襲被害をうけていませんでしたから、1分の希望で山の手線へ。よく山手線が動いていたものです、逃げ惑う一夜を焼野原で防空壕を見つけ、そこで休み眠ったのですが、眼前近くの高架鉄道に焼夷弾の火柱がたち、高架鉄道が火の壁になっていたからでした、兄に聞くとあれは山手線でなく東武線だといっていましたから。

もちろん、ひと電車では池袋に行けず途中歩いたりしてやっと姉の家にとどり着き、そこで家族全員無事を見たときは天に上った気持ち、地獄から天国だったとよく言っていました。

その時、軍隊で支給されたというあずき色の高粱飯を、父はこんなまずいもの食えるか、こんなもので戦争できるかといいながらくれたのですが、私にはおいしそうなものとして今も記憶に残っています。

37歳で赤紙がきたとき、こんな鉄砲を3発軍事教練で撃っただけの老いぼれをかき集めるようでは、日本は負けだなおもったそうですが、静岡県熊切で高度戦闘機の燃料アルコールに松根油抽出作業から 広島県呉付近の海岸線本土決戦塹壕掘り、そして、ヒロシマ原爆の死体処理作業などわりと楽しそうによく話していたものです。



明治末41年(1908)生まれ
越後田舎の百姓育ち小学校卒13歳で上京 製本工場で小僧から修業した一般的日本人の楽天性が無一物になった戦後日本の困難期を乗り切らせたのでしよう。

高津5期 HP 「父を語る」のテーマから

「親父の大工道具」

清水健二

先回の「母を語る」というテーマでは、「母の涙」と題して私の兄の戦死に関連して、戦争のもたらす悲劇を綴ったが、今回は父の仕事から受けた事などを記してみたい。

親父は昭和55年(1980年) 行年86歳で他界した。母は94歳で亡くなったから共に大往生である。兄の戦死で次男の私は跡取りになったので、ずっと両親と同居してきた。従って父とは46年、母とは55年一緒だった。父も私も仕事で単身赴任の期間があったのでそれを差し引いても長い付き合いだったと言える。私が社会人になり結婚してからは、家庭内の事や両親のことは妻に任せ、気苦労したであろうと思うと妻に頭が上がらない。

改めて親父の事を書くとなると、分かっているようで分かっていないと痛感した。親父は清水家の跡取りだったので、仏壇の引き出しに何かあったなと思い出し探し出してみた。憶えの無い資料が出てきて新発見だった。

明治18年(1885年)の戸籍簿が出てきた。和紙に毛筆で書かれたB5版大のもので、私から4代前の名前から始まっていた。調べてみると明治5年に戸籍制度ができ、明治19年に屋敷番から地番が採用され、家族の出生、死亡、婚姻、



養子縁組等が記載されるようになり、現存する一番古い様式とされているらしい。その1年前の戸籍簿だがこの様式に従い忠実に記されたもので、「へえー・・・」と思いな

がら丹念に見入った。「河内国石川郡山田村(現在の大阪府富田林市太子町山田)」とある。8頁に亘り家族の明細があった。

他に写真の類や父の軍隊手帳まで残っていた。この手帳には大正4年から7年の3年間兵役に服し、細かい行動が記載されていた。身長、体重、靴の寸法まで尺貫法で書かれてあった。また射撃大会で銅賞を賜り、胸につける徽章(きしょう)まで出てきた。そういえば親父は目が良く集中力もあって、的に向かって引き金を引くと弾道の軌跡が見えると言っていた事を思いだした。

親父の子供時代は尋常小学校は4年で終業し、そのあと尋常高等小学校2年と続くが、田舎では大抵4年生で卒業して家を出、丁稚奉公にいったものらしい。親父も10歳で親元を離れ、大阪市内の指物師のもとにあずけられ、職人として木工仕事に従事することになった。真面目で手先が器用だったようで、指物工から宮大工の道へ進んだ。

3年間軍隊での服役を終えて、同郷だった母と結婚する縁に恵まれた。百姓出の母は職人にあこがれていて、宮大工の父との縁談にとびついたという。結婚式の日には仲人から「お前の旦那はあの人やで。憶えとるか？」と言われたが、成人した父の姿はよく分からなかったと、母は言って笑わせていた。親父の方は母の姿を知っていたらしく、まずまずホツとする話である。

親父は指物師として、作った家具は今も家に残っていて、現在私が使っている机は頑丈でガタつくこともなく重宝にしている。長姉が結婚する時に持っていった桐の筆筒も親父の制作したものだった。私は子供の頃から親父の仕事に関心があり、傍でよく質問していた事を憶えている。何時も返って来る言葉は「じっと見てたら ええ。教えたらすぐ忘れるやろ。自分で覚えた事は忘れへんからな」であった。また仕事に対しての集中力は高く、二階の仕事場において、階下に泥棒が入っても気が付かず、後刻、母から「お父さんは仕事をしていると何も聞こえんようになる」と詰らされていたことがあった。

親父は宮大工としても内装工芸職人としても通用していたようで、各地での現場工事が多く出張して在宅する事は少なかった。太平洋戦争前には大林組の傘下の会社に勤務し、今で言うインテリア工芸会社員として、満洲奉天(瀋陽)へ単身赴任し家

の事は母に任せきりだった。それでも母は自分が選んだ大工だったので、辛抱するしか無かったとぼやいていた。

戦況は悪化し、親父の仕事も停滞し始め終戦の2年前に帰国した。日本での仕事も失くなったことから自立し、一家で富田林市の田舎に疎開した頃は、個人の邸宅建築の請負工事をして生活した。この邸宅は街道筋にあり、今も現存していて、親父はいい家を建てたものだなと通る度に見ながら思っている。

終戦前後は請負仕事も少なく、田舎の納屋の修理や改造ぐらいで食いつないだ。我々一家も終戦後再び大阪市内に戻り、父は昔の仲間たちと助け合いながら仕事にありついていた。

そんな中、大阪四天王寺の仕事が舞い込み、やっと宮大工としての腕を振るえる事になり頑張ったようだった。工事を終えて寺の貫主から色紙を記念にもらって感激し、偉い坊さんの揮毫だと大切に床の間に飾り、今もそのままぶら下がっている。「萬福来」のたった3文字だがなかなかの達筆である。



親父は子供が好きで、良く山や川、海等へ連れ出し遊んでくれた。家で仕事をする時は私を仕事場へ呼びつけ手助けを求めた。私は自然と木材の種類や硬軟、木目の通りから木の上下や表裏をおぼえた。時には材質の硬い紫檀(シタン)、黒檀(コクタン)、鉄刀木(タガヤサン)、花欄(カリン)など素人ではとても加工困難な堅い木で、箱や器、装飾品等を作っていた。様々な形の道具を用い、その使い方を見てきたがとても自分ではやれるものではなかった。大工仕事では墨つぼという道具を使って、小錐を立て墨の着いた糸を指で弾くと、5~6mの長い木でも見事に線が引け、その技には驚いたものである。桧の柱材を、仕上げカンナで引くとカンナ幅の透き通った薄膜を長々と削り出した。親父はよく「道具が仕事をするんや」と言い大工道具を大切にしていた。それには刃物を磨ぐ砥石を使いこなすことが最大のポイントになるが、これはそう簡単には上達できないものである。

私がかつて、奈良の法隆寺専任の宮大工である 西岡常一氏の本を読んだ時、父が教えてくれた数々の言葉がそのまま書かれていて、宮大工はみんな同じことを学んでいるんだなと思った。父は西岡氏のように強烈な個性で突き進むタイプでなく、控えめで自慢するタイプでなかったが、信念は同じものを持っていたと思っている。

私が大学にゆきたいと言った時、「もし入れなったら、俺が連れて仕事を教えたるからな」と言ってくれた。しかし入学したら、それ以来父は何も言わなくなった。親父は学歴が無かったことから、学校への憧れが強く、息子には行かせてやろうと思っていたのだろう。その反面、息子に仕事を引き継いでもらいたかったようである。幸か不幸か私の人生は大学入学が分岐点になった。親父は晩年、大事にしていた大工道具を、手放したくなかった何点かを残して、自分の仲間達に分け与えてしまった。

私は機械工学を学んだが、会社に入って配属された職場がプラント建設や、建築の仕事が中心だった事から当然、建設現場への出張が多く、親父の危篤の知らせを受けた時は広島に居て、帰宅した時は既に昇天していた。1980年私は46歳だった。

親父没後の翌年、奈良市在住の彫刻家、S先生との出会いが縁で、仏像彫刻の手ほどきを受ける機会に恵まれた。先生は日展の評議員で大学の教授でもあった。また先生の父上は仏師であった。彫刻分野の芸術家といえ、スキルは所詮その道の職人である。

彫刻を始めるようになって、親父の残してくれた大工道具を手になることになった。平、丸、角、箱等の様々な形のノミやカンナを使い、こんなにノコギリはよく切れるものなのか、こんなに変形ノミは滑るように削れるものかと驚いたものである。親父の大工道具が良かったのである。「清水君は、なかなか上手に道具を使うね」と褒められたことがある。先生から仏像彫刻の技法のみならず、仏教伝来の頃の古仏から、各時代の像の様式、形状、特徴等を学ぶこともでき、私は完全にはまり込んでしまった。

1985年、仏像彫刻を初めてから4年を経て、母の実家のある村で、月参りの観音講が開かれていたお堂が失火で焼け、本尊の観音像が丸焦げになった。私の従兄

から連絡があって、私が趣味で仏像彫刻をやっていることを知って新しい仏像を制作してくれと依頼された。

先生に相談したところ、「願っても無いことだよ、挑戦してみたら」と背中を押され受けたものの、会社の仕事に追われる中、休日を返上して観音像制作に打ち込んだ。

ほぼ1年かかって、黒焦げになった古い観音像と同じ大きさの約1.5m高さのものを、桂の一木造りで完成し、眉間に設ける白毫(びやくごう)に水晶を埋め込んだ。こうして仏像奉納第1号の「聖観世音菩薩立像」が誕生した。1986年6月、新しく建った観音堂と観音像の落慶法要に出席し、村人達に喜んでもらえたことで、苦勞した甲斐があったと実感した。親父がもし見たらその拙さに笑われそうだが、堂内に安置された仏像に香を炊き、花を供え、明かりを灯し、講中の方々の読経の音声を耳にしながら、私は感無量であった。

仏像制作中、よく仕事場へ覗きにきた母の心配顔を思い出すが、父母の郷里に奉納できた事は私にとって、両親の供養にもなったと思っている。



(後記)

私の娘2人は親父や母が亡くなるまで一緒に暮らしていたが、前回の「母の涙」の投稿記事を、先日メールしてやったら、「お父さん(私のこと)の子供の頃や、おばあちゃんのことを初めて知ったわ。おじいちゃんのこと書いて頂戴ね」と言われた。今回の「親父の大工道具」もメールしてやろうと思っている。

「母..や父..を語る」のテーマを提案して頂いたことで改めて両親を偲ぶことができたことを感謝している。

令和3年5月